

地域看護実習におけるIT環境整備の試み

—意義と課題—

酒井 太一¹⁾、佐藤 憲子²⁾、高野 英恵²⁾、桂 晶子²⁾、佐々木久美子²⁾、安齋由貴子²⁾

キーワード：地域看護実習、IT、情報格差

要 旨

本学では、地域看護実習におけるInformation Technology（以下、IT）環境整備を平成16年度に開始した。本研究は、学生を対象としたインタビュー内容の質的分析を行い、IT環境整備の意義と課題を明らかにすることを目的とした。

その結果、意義では【グループ学習を促進する】【学習の機会の平等を保障する】【個人学習を促進する】の3つのカテゴリーが抽出された。課題では【インターネット接続の不具合のため学習が滞る】【パソコン・周辺機器の不足のため学習ができない】【パソコン・周辺機器の不具合のため学習が滞る】【パソコンの作業により負担が増える】の4つのカテゴリーが抽出された。今後も課題を踏まえ、IT環境整備を推進していく必要性が示唆された。

A Trial of Implementing Information Technology Environment in Community Health Nursing Training : Meanings and Problems

Taichi Sakai¹⁾, Noriko Sato²⁾, Hanae Takano²⁾, Shoko Kathura²⁾, Kumiko Sasaki²⁾, Yukiko Anzai²⁾

Key words : community health nursing training, information technology, digital divide

Abstract :

A trial information technology environment (ITE) program was implemented for community health nursing training at Miyagi University from 2004. The purpose of the present study was to consider meanings and problems related to that trial.

Interviews of 14 students were conducted and data obtained were analyzed qualitatively. Merits of the ITE were divided into 3 categories: 1) Enhancement of group learning, 2) Enhancement of individual learning, and 3) Reducing the "digital divide." Problems related to the ITE were divided into 4 categories: 1) Trainee discomfort with internet use, 2) Insufficient supply of PCs and peripheral equipment, 3) Functional troubles with PCs and peripheral equipment, 4) Increase in stress for trainees.

These findings suggested that further promotion of ITE implementation would be indispensable for community health nursing training

1) 久留米大学医学部看護学科 (Kurume University School of Nursing)

2) 宮城大学看護学部 (Miyagi University School of Nursing)

1. 緒 言

近年、Information Technology（以下、IT）は急速に発展しており、現代の生活において欠くことができないものになっている。それは、地域保健福祉の現場においても同様で、そこで働く専門職種には従来の対人的な援助技術などに加え、適正な情報処理能力とその活用が求められている¹⁻⁷⁾。看護系大学の教育においても、ITが積極的に導入され、講義や演習などで活用されている。例えば、学生は最新情報の検索・収集、レポートなどの文書作成、プレゼンテーションなどにITを利用している。さらに、近年では、コンピュータやネットワークを活用した学習であるe-learningの開発・活用が注目されている⁸⁻¹⁰⁾。しかしその反面、学外で行われる看護実習においては、学生が利用できるIT環境の整備は進んでいないのが現状である。また、看護実習におけるIT環境整備に関する先行研究は見つけることができない。

本学では地域看護実習において、インターネット接続されたノート型パーソナルコンピュータ（以下、パソコン）や各種周辺機器を実習控え室に設置する試みを、平成16年度に開始した。そこで、本研究では、学生を対象としたインタビュー内容の質的分析によって、地域看護実習におけるIT環境整備の試みの意義と課題を検討したので報告する。

2. 方 法

1) 調査対象

平成16年度に地域看護実習を履修・単位取得し4年次に進級した学生で、調査に同意が得られた者14名とした。

本学の地域看護実習を含めた領域別実習は3年次後期に行われる。なお、既に1年次から3年次前期までの間に、共通教育科目及び専門教育科目の講義、基礎看護実習などを履修している。また、共通教育科目の中においては、コンピュータの基礎や統計処理なども学習している。実習期間は3週間、実習場所は市町村保健センター及び保健所（実習地が政令指定都市の場合は、政令市型保健所のみ）である。実習体制は、学生4～5名が1グループに編成され、各グループに1名の教員

が常時配置される。主な実習内容は、様々な保健福祉事業への参加・見学、家庭訪問への同行、健康教育の実施等に加え、各種オリエンテーションや関係部署の担当者からの講義である。実習後半には、学習の成果をグループでまとめ、実習指導者への発表や他実習地の学生とディスカッションを実施する。また、毎日の実習開始時と終了時にはグループ学生と教員によるカンファレンスが行われる。各実習地には、学生控え室が原則的に確保され、カンファレンスや実習準備、自習や休憩等に使用されている。

学生は、実習期間を通じ、学生控え室に整備された各種IT環境を自由に使用した。整備された具体的な機器類は、ノート型パソコン、インターネット接続用カード型携帯電話、外付けCD/DVDドライブ、デジタルカメラ、プリンター、外付けFDドライブの各1台である。

2) 調査方法

調査に同意の得られた学生に対し、静寂が保たれ、インタビュー内容が他者に漏れない環境下にて面接調査を行った。面接は半構成面接とし、実習において利用したIT環境について、利用方法、意義、課題などをインタビューした。時間は一人当たり30分程度とし、正確な記録を得るために同意を得てICレコーダーにて録音した。調査は実習を実施した次年度にあたる平成17年5月に行った。

3) 分析方法

録音したインタビュー内容から逐語録を作成し、IT環境の利用方法、意義、課題に関する内容を抽出しそれぞれに分類した。その後、内容をコード化し、各分類内において類似・共通したデータをまとめサブカテゴリーとした。さらに、それらのサブカテゴリーは相互の関連性を考慮し、より抽象度の高いカテゴリーにまとめた。なお、これらの作業は本調査の目的・内容を熟知した共同研究者と共に行った。

3. 倫理的配慮

調査の目的、方法、倫理的な配慮については、研究者が口頭と書面にて、対象者に十分な説明を

表1. IT環境の利用方法

学生が他者との関わりの中で利用する	
学生同士で情報を共有する	<ul style="list-style-type: none"> 一つの文書を複製し共有する 持ち寄った文書を結合し共有する ディスカッション内容をまとめ共有する
学生や教員との関わりの中で調べる	<ul style="list-style-type: none"> 学生同士でディスカッションしながら調べる 教員の助言に基づいて調べる
実習指導者に学習成果をプレゼンテーションする (*)	
学生が個人で利用する	
地域独自・最新の情報を調べる	<ul style="list-style-type: none"> 健康教育のために最新の情報・画像を調べる 地区踏査のために特定地域の情報・地図を調べる 実習する自治体の概要を調べる 地域の関係機関の概要を調べる 関係法規を調べる (*)
文書・資料の作成・印刷をする	<ul style="list-style-type: none"> 毎日の実習記録を作成・印刷する 健康教育の指導案を作成・印刷する 各種カンファレンスの資料を作成・印刷する
実習によって派生した関心事項を調べる	<ul style="list-style-type: none"> 学生自身が居住する自治体の概要を調べる 将来の職業選択として保健師採用情報を調べる

*部は、実習中に行わなかったが諸条件が合えば行いたかったと述べられた内容。

行い、理解と了解を得た後に研究への協力を依頼した。具体的には、インタビューで収集されたデータは個人情報として厳重に管理し、他の研究や教育上の情報として用いないことにした。また、協力するか否かは対象者が選択でき、一旦は調査に了解した後でも拒否できることを保障した。協力の可否や回答内容によって、対象者の実習の評価をはじめとする不利益は生じないように配慮し、調査時期を実習評価が終了した次年度以降にした。さらに、個人が特定できるインタビューのデータの取り扱いには研究者のみに限り、共同研究者との分析には匿名化したデータを用いた。また、分析終了後のデータは全て消去した。

なお、本調査に関しては、事前に宮城大学研究倫理委員会の承認を得た。

4. 用語の定義

IT環境：Information Technology (IT) とは、情報工学あるいは情報通信技術と訳される。現在、

一般的にITはコンピューター及び関連機器、またはそれらに関するインフラ、使用方法、使用状況など幅広い意味で用いられている。本研究においては、コンピューター及び関連機器類が設置された環境をIT環境とした。

5. 結果

1) 対象の属性

調査対象の学生の年齢は、21歳～23歳。性別は、全て女性であった。

2) IT環境の利用方法

本文中では以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを《 》、コードを『 』、主な語りを「 」にて示す。

IT環境の利用方法に関する結果を、表1に示した。

利用方法としては、【学生が他者との関わりの中で利用する】【学生が個人で利用する】の2つ

の категорияが抽出された。

(1) 【学生が他者との関わりの中で利用する】
中の3つのサブカテゴリー

① 《学生同士が情報を共有する》

ある学生が所有する一つの文書を複製したり、逆に、学生各自が持ち寄った文書を結合して新たな文書にまとめたりしていた。また、学生同士のディスカッションの内容はその場でパソコンを用いて入力され、学生同士で共有されていた。

インタビューでは、「パソコンを使ったのは、最後の実習のまとめの時のような気がするんですけど。皆で文書を合わせたりする時に。各自で考えてきた良い文章を持ち寄って、一つの文章を完成させようとして…」等と語られていた。

② 《学生や教員との関わりの中で調べる》

学生同士のディスカッションを通じ、発生した疑問を調べながら考察を深めていた。また、教員を含めたディスカッションにおいては、教員の助言に基づいて、学生がそれを調べることに用いていた。

③ 《実習指導者に学習成果をプレゼンテーションする》

実際には行われなかったが、諸々の条件(プロジェクターやプレゼンテーションソフトの導入、学生のプレゼンテーションソフトの操作技術)が整っていれば行いたかったとの希望があった。

(2) 【学生が個人で利用する】の中の3つのサブカテゴリー

① 《地域独自・最新の情報を調べる》

集団に対する健康教育を行うために、最新の情報や画像を調べていた。また、地区踏査を行うにあたり、踏査する特定の地域の情報や地図を調べていた。さらに、実習地となる自治体や地域の関係機関の概要についても調べていた。

インタビューでは、「健康教育の準備をする時に、子どもの死亡原因の統計を調べるためにインターネットを使ったと思います。控え室においてある本にもあったのですが情報

が古いので、最新のところではどうなっているのかなあと。本とあわせてインターネットで確認しました。」「家庭訪問で障害児がいる家に行きました。その子がAという施設を使っていて。そのAという施設が分からなくて、どんな所だろうと調べました。皆、色々調べていました。地区踏査に行く時にその地区について調べたり。」等と語られていた。

なお、実際に行くことはなかったが、時間的な余裕があれば関係法規についてより詳細に調べたかったとの希望があった。

② 《文書・資料を作成・印刷する》

毎日の実習記録をはじめ、健康教育のための指導案、各種カンファレンス(同行した家庭訪問事例のカンファレンスや、学習成果を発表する実習最終日のカンファレンス)のための資料を作成・印刷していた。

③ 《実習によって派生した関心事項を調べる》

実習を通じて公衆衛生行政や保健師についての関心が高まったことで、学生自身が居住する自治体の概要や保健福祉施策を調べたり、将来的な自分自身の職業選択のために保健師採用情報を調べたりしていた。

インタビューでは、「自分の住んでいる町のホームページを見たりして。遊んでいたわけではなくて、町の人口とか、ホームページがどのようにできているのかを確認しました。」等と語られていた。

3) IT環境の利用の意義

IT環境の利用の意義に関する結果を、表2に示した。

利用の意義としては、【グループ学習を促進する】【学習の機会の平等を保障する】【個人学習を促進する】の3つのカテゴリーが抽出された。

(1) 【グループ学習を促進する】

学生同士のカンファレンスにおいて、議事録をまとめながらディスカッションしたり、発生した疑問をその場ですぐに調べたりしていた。それにより、学生の相互学習を促進していた。

インタビューでは、「インターネットが使える

表2. IT環境の利用の意義

グループ学習を促進する	
	議事録をまとめながらディスカッションができる
	調べながらディスカッションができる
学習の機会の平等を保障する	
	情報・資料を個人的に所有できる
	自宅にインターネット環境が無くても実習地で調べられる
	自宅にプリンターが無くても実習地で印刷できる
個人学習を促進する	
学生の調べる意欲を高める	Just on time で調べられる
	検索語・条件を特定しなくても調べられる
	短時間で調べられる
学生が欲しい情報の質と量に応える	最新の情報が得られる
	大量の情報が得られる
	詳細な情報が得られる
	画像情報が得られる
学生の文書作成・資料処理能力を助ける	短時間で文書作成・資料整理ができる
	正確で整った文書作成ができる
実習地－自宅間で効率的な学習を可能にする	実習地と自宅の両方で実習記録が書ける
	実習地で学習が進められ、自宅で余裕ができる

たら、その場で皆が思いついたことをココにあるんじゃないいう風にして調べられる。もし見つけられなくても、分担して家に帰って調べて、次の日にまとめる作業ができるじゃないですか。だから、やっぱり効率的。」等と語られていた。

(2) 【学習の機会の平等を保障する】

電子化した情報は、そのまま記憶媒体に保存したり印刷したりすることで、情報や資料を学生各自が所有できた。また、自宅にインターネット環境が整っていない者でも実習地で必要なことは調べられた。さらに、自宅にプリンターを所有しない者は、実習地で印刷することもできていた。

インタビューでは、「安心感があったと思います。すぐに調べられるっていう。学校に帰ったりしなくても、調べられるっていう。心強かった気がします。」「自分の家にはネットがないので、学校までわざわざ行かなきゃいけなくなってしまう。実習先にあるということ

なので、そこですぐ調べたりできるんで、ありがたいなと思いました。」「パソコンが家にあってもプリンターまである人って、一人暮らしとだと少ないと思うので、プリントアウトができる環境が整っているというのは良いなあとと思います。」等と語られていた。

(3) 【個人学習を促進する】の中の4つのサブカテゴリー

① 《学生の調べる意欲を高める》

学生の調べる際の学習活動の志向性とITの特性の適合により、結果的に学習意欲を高めていたことである。例えば、調べたいことを調べたい時に調べたいだけ調べられること (Just on time)、調べたい内容について検索語・条件を特定しなくても調べられること (Fuzzy string searching)、書籍で調べるよりもインターネットを用いた方が短時間で調べられることがあげられていた。

インタビューでは、「パソコンがあると何かすぐ調べたいものが調べられる。キーワード

を入れると何か出てきて、参考になることが多かったと思う。」「先生とかは、その本を読んでいて内容を理解しているから、この目次から推測してこの辺にこんなことが書いてあるって分かると思うんですけど。初めての分野に行かされた身としては、目次から何が書いてあるか分からない。そんな時に、キーワード入れて、それにヒットするものがバツと出てくる。違ったら別のキーワードを入れる。自分の考えで調べていける。」等と語られていた。

② 《学生が欲しい情報の質と量に応える》

書籍に比べてより最新の情報が得られること、大量な情報を得ることができること、逆に、詳細に絞り込んだ情報も得られることである。さらに、画像検索により画像情報が得られることもあげられた。

インタビューでは、「(インターネットを利用できる環境整備は) 地域看護実習に関しては進めていくべき。地域と言うのは取り組み自体も年々変わっていくものなので、新しい情報がより必要になるから。」「IT環境があった方が実習は円滑に進むだろうし、いい実習ができると思う。取れる情報量が全然違うんじゃないかな。地域看護実習だからというのもあるけど、調べる量が多い。他の領域だったら、そんなにネットは使わないと思うんですよ。そんなに必要ないんじゃないかなと思います。地域は特別ですからね。」等と語られていた。

③ 《学生の文書作成・資料処理能力を助ける》

大学等においてレポート作成をパソコンで行っている学生にとっては、パソコンを用いた方が手書きで行うよりも、実習記録や各種資料を短時間でまとめられることである。また、手書きに比べて体裁の整った文書を作成しやすいこともあげていた。

④ 《実習地－自宅間で効率的な学習を可能にする》

実習地と自宅における学習の効率性の向上があげられていた。例えば、実習地での貴重な経験や他の学生とのディスカッションは実

習・カンファレンス記録などへ即時に言語化することができる。さらに、実習中の短い空き時間を有効に利用して、必要な事柄を調べることができる。それにより、自宅ではこれらを基にした十分な考察に集中できる時間の確保ができていた。このような効率的な学習は、睡眠・休養時間などの体調管理の時間確保にも役立っていた。

インタビューでは、「実習記録は、空き時間にその日にあったことは入力してしまう。できれば空き時間で終わらせたいなと思って利用しました。これがやりやすかったというか、家では実習記録にあまり時間を取られることもなく、ゆっくりと考える時間が出来たので、すごく良かったです。」等と語られていた。

4) IT環境の利用上の課題

IT環境の利用上の課題に関する結果を、表3に示した。IT環境の利用上の課題として、以下の4つのカテゴリーが抽出された。

(1)【インターネット接続の不具合のため学習が滞る】

インターネットの接続速度が遅かったり接続状況が不安定であったりしたため、インターネットを用いた情報の検索時などには、著しく学習の進捗が滞った。

インタビューでは、「学校のパソコンだったら早かったと思うんですけど、スピードの遅いネットだったんで、ちゃんと調べる前に断

表3. IT環境の利用上の課題

インターネットへの接続の不具合のため学習が滞る	インターネットの接続速度が遅い
	インターネットの接続状況が不安定
パソコン・周辺機器の不足のため学習ができない	パソコンの台数が不足
	必要な周辺機器が無い
パソコン・周辺機器の不具合のため学習が滞る	パソコンがフリーズする
	プリンターの出力が遅い
パソコンの作業により負担が増える	実習記録に書く文字量が手書きの場合よりも増す
	目が疲れる

念したししました。」と語られていた。

(2) 【パソコン・周辺機器の不足のため学習ができない】

パソコンや周辺機器の設置台数が足りないために、学習が進められなくなったというものである。例えば、パソコンは一台しか設置しなかったため、学生間でその利用の順番待ちをしたり、相互に気を使いあったりしていた。

インタビューでは、「パソコンが一個しかなかったんで、順番待ちっていうか。しょうがないですけど。もっとあればよかったかなと思いました。」等と語られていた。

(3) 【パソコン・周辺機器の不具合のため学習が滞る】

パソコンがフリーズしたりプリンターの出力が遅かったりしたため、学習の進捗が滞ったというものである。また、プリンターの出力に関しては、学生が必要とする大量の印刷に、設置したインクジェット式プリンターでは対応が追いつかなかったことによる。

(4) 【パソコンの作業により負担が増える】

実習記録を書くことにおいて手書きよりもパソコンの方が記述する文字量が増えることから、結果的に負担感が増すことや、Visual Display Terminal (以下、VDT) 作業による眼精疲労を訴える学生も1名いた。

インタビューでは、「パソコンで打っているので、手で書くよりも文字数が増えちゃって、埋めなきゃいけないような感覚に囚われて、一所懸命打っていた記憶があった。打っていると目も疲れてきてみたいない感じ。」等と語られていた。

6. 考 察

1) IT環境整備の意義

(1) 情報格差発生の予防

本調査結果では、IT環境の利用の意義として『自宅にインターネット環境が無くても実習地で調べられる』『自宅にプリンターが無くても実習地で印刷できる』などがあがっていた。学生の中には、自宅に十分なIT環境を持

たない者がおり、実習地のそれを活用していたことが示唆された。自宅に十分なIT環境を持たない者が、遠方の実習地に出向く場合、大学などのIT環境が整った場所を利用するのが困難になる。それにより、実習期間中は、自宅にあるIT環境のみに依存せざるをえない。したがって、自宅のIT環境の差が、学生の学習にも影響を与え、最終的には情報格差(Digital divide)が発生する可能性が懸念される。

情報格差とは、所有・入手することができる情報の質・量から生じる格差と、それらによってもたらされる経済的・社会的格差¹²⁾とされている。そもそもは、アメリカ商務省が同国内で発生している前述の社会現象を1999年に報告書¹³⁾で発表した造語である。教員としては、学生の学習の機会の平等を保障し、学生間の情報格差発生を予防することがのぞましい。したがって、実習地に必要最低限のIT環境の整備をすることは意義があると考ええる。

なお、本研究結果からは、パソコンやプリンターなどのハードウェアに関する内容のみ抽出され、ソフトウェアや個人スキルに関する内容はなかった。しかしながら、情報格差を考える際には、ソフトウェアや個人スキルについても重要である。今後、IT環境の整備を推進する場合、ハードウェアのみならず、ソフトウェアの充実や個人スキルの向上への配慮も必要であると考ええる。

(2) 地域看護実習に必要な情報源

本研究結果では、IT環境利用の意義として《学生が欲しい情報の質と量に答える》があげられていた。地域看護実習において必要な情報の質・量には特徴がある。例えば、必要な情報としては、実習地となる市町村自治体の情報や地区特性、地域の保健福祉分野の関連機関・組織の情報、国や自治体の保健福祉行政施策の情報や関係法規、そして最新の保健福祉統計やデータなどがあげられる。このように、必要な情報は最新で、幅広く、その量も多い。また、地域独自の詳細なものも含

まれている。近年では、これらの情報はウェブ上に公開され、従来は書籍などの紙媒体で入手が困難だった情報も、インターネットを通じて容易に入手できるようになっている。実際に学生は、IT環境の利用法として《地域独自・最新の情報を調べる》ことをあげており、インターネットの利便性が享受されていたことが示唆された。

また、地域看護実習の実習地は、主に市町村役場や保健センター・保健所などになっている。これらの実習施設は、大学などの教育機関に近接しない遠隔地であり、大学の図書館などを利用した知識・情報の収集や補完が困難になる。実習は、経験そのものも重要であるが、経験を基にした考察も重要である。その過程においては適正な知識や情報が必要となり、それらを入手できる学習環境・機会を調整することが望ましい。この点で、インターネットに接続されたIT環境は、大学に近接しない場が実習地となる地域看護実習で、知識・情報の収集・補完ができる必要最低限度の学習環境を保障する手立ての一つであると考えられる。もちろん、本学ではインターネットのみを学習の情報源とはしてはならず、実習地における学習環境として、学生控え室に相当量の関係書籍・テキストも用意している。

以上、地域看護実習に必要な情報の質・量、そして実習地の特徴の点から、インターネットを含めたIT環境整備の意義はあると考えられる。

2) IT環境整備における課題と今後の取り組み

(1) 快適なIT環境の維持・管理の必要性

本調査結果では、インターネットへの接続の不具合やパソコン・周辺機器不足および不具合のために学習が滞るなどについて、IT環境の利用上の課題としてあげられていた。これらについては、当面は技術的・経済的に可能な範囲で対応していく必要があると考えられる。

総務省では、いつでも、どこでも、何でも、誰でも簡単にネットワークにつながり、ICT

(Information and Communication Technology：情報通信技術)の恩恵を実感できるユビキタス(ubiquitous：どこにでもあること)ネット社会の実現を目指すu-Japan政策を、2004年に策定した。今後、ITはより良質で安定した状態で提供されることが一般的になることが予想される。したがって、実習地にパソコンやその周辺機器を導入したり、インターネットを利用可能にしたりするハード面の導入だけにとどまらず、あくまでも快適なIT環境を維持・管理していくための継続的な配慮が必要であると考えられる。

(2) IT環境によるデメリットの発生と教員による対応の必要性

斎木ら¹⁴⁾は、ITを用いる高度情報化社会のデメリットとして、人間関係の希薄化、コンピューターへの依存、人間の能力の衰え、情報の氾濫を挙げている。例えば、地域看護実習においては、カンファレンスやグループ学習、教員との面接などにあてられるべき時間に、学生がパソコンに向かいがちになってしまえば実習の大きな弊害となる。

本調査結果では、学生のIT環境の利用方法として、【学生が他者との関わりの中で利用する】というカテゴリーが見出されていた。つまり、学生はIT環境を個人的な学習ツールとして、情報検索や文書・資料作成に意欲的に用いただけではなく、学生間でのディスカッションや情報の共有など、他者との関わりの中で学習を促進するツールとして用いられていたことが明らかになった。現在の学生は、彼らの周囲にあるITを、コミュニケーション・ツールとして日常的に使用している。したがって、学生は与えられたIT環境を、違和感なくグループ学習に用いていたことが推察される。

以上のことから、IT環境の導入にあたって、教員が学生の利用状況に対する適切な配慮をしたり、グループ学習の機会の確保をしたりすれば、ITの導入によるデメリットの発生を過度に警戒する必要性は低いと考えられた。むしろ、IT環境はグループ学習を促進さ

せるというメリットもあり、その点をさらに促進させる関わりが必要である。

一方で、本調査結果では、IT環境の利用上の課題の中に『目が疲れる』といったVDT作業による眼精疲労の発生も示されていた。このような点については、教員はIT環境の利用時間を制限したり、他の学習方法を提案したりするなどの対応が必要である。また、電子化された情報は容易に複製や加工が可能であるため、学生が不正に文書・資料を作成する可能性も否定できない。そのようなIT環境導入に伴うデメリットの発生については、教員の十分な指導・配慮が必要である。

7. 結 語

地域看護実習におけるIT環境整備を試み、その取り組みの意義と課題について、学生を対象としたインタビュー調査から明らかにした。その結果、IT環境整備を試みは、学生間の情報格差の予防や地域看護実習における情報源としての意義がある半面、快適なIT環境の維持・管理やデメリット発生などに対応しつつ取り組む必要があることが示唆された。

今後も我々は、地域看護実習へのIT環境整備は継続的に進めていきたいと考えている。ただし、実習において学生が得る学びで最も重要なのは、インターネットから得られる事柄ではなく、地域住民や保健師をはじめとする専門職種との対人的な関わりから得られる事柄であることは言うまでもない。したがって、IT環境に対する過度の期待・依存には十分に配慮し、あくまでも様々な実習環境整備の一環として取り組んでいくことが望ましいと考えている。

本稿内容の一部は、第26回日本看護科学学会学術集会（2006年）において発表したものである。

文 献

- 1) 森瀬澄夫：保健指導におけるITの活用. 保健師ジャーナル, 64 (1), 8-11, 2008
- 2) 酒巻哲夫：テレメンタリングによる保健指導方法. 保健師ジャーナル, 64 (1), 12-17, 2008
- 3) 石井多樹：ITを用いた特定保健指導プログラム げんき！家庭応援団. 保健師ジャーナル, 64 (1), 18-23, 2008
- 4) 杉原治美, 多田敏子：ITを活用したバーチャル相談室「まちの保健室」. 保健師ジャーナル, 64 (1), 24-28, 2008
- 5) 井上順子, 正藤露子：IT活用歩数計による健康づくり. 保健師ジャーナル, 64 (1), 29-33, 2008
- 6) 坂井紀子, 村上滋子：ITを取り入れた健康運動教室. 保健師ジャーナル, 64 (1), 34-39, 2008
- 7) 池田裕子, 向井智子：長岡京市の電子情報化への取り組み. 保健師ジャーナル, 61 (6), 507-512, 2005
- 8) 中村秀敏：看護教育におけるe-learningの現状. 看護教育, 48 (4), 280-284, 2007
- 9) 大池美也子, 末次典恵：e-learning教材の開発と活用. 看護教育, 48 (4), 292-297, 2007
- 10) 高嶋由貴恵, 中村裕美子：看護実践能力の獲得を支援するe-learning. 看護教育, 48 (4), 298-302, 2007
- 11) 山口栄一：「教える」機能を拡張するe-learning. 看護教育, 48 (4), 303-307, 2007
- 12) デイリー新語辞典 (internet版). 三省堂
- 13) Department of Commerce. National Telecommunications and Information Administration, Falling Through the Net: Defining the Digital Divide, 1999
- 14) 斎木邦弘 監修：情報リテラシーの基礎. pp. 6, 近代科学社, 2007